オーダーメイド

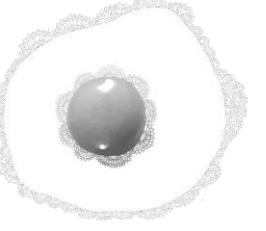
目次

二〇二四年四月一日　04
二〇二四年四月二日　21
二〇二四年四月五日　43
二〇二四年四月一〇日　47
二〇二四年五月六日　60
二〇二四年六月一〇日　66
二〇二四年六月十四日　79
二〇二四年七月五日　100

[2019.2.12]　17
[2019.1.9]　34
[2021.2.5]　52
[2021.3.31]　71
[2023.12.23]　87
[2023.12.24]　108

あとがき　118

戦後伊奈スレ古民家カフェ開業本



二〇二四年四月一日

「お前、一体なんなんだ？」
山道を走るステーションワゴンの助手席で、スレインは痺れを切らして聞いた。運転席の伊奈帆は視線を前に向けたまま、何が？　ととぼけた返事を返してくる。フロントガラスの向こう側には木々と土道と空。人工物は何も見えない。
そういった、迫りくる大自然のパノラマがもう小一時間続いている。
「訳がわからない。説明はあるのか？」
「あるけど、とりあえずそれは後。君にはこれ」
伊奈帆はダッシュボードを開き、取り出したものを差し出す。紙？
「なんだ、これ？」
折りたたんだ紙を広げると、これが地図だということがわかった。
「ナビゲートして。ほら。地図が真っ白」

運転席のナビゲーションウィンドウには、道すら表示されていない。だからといって、こんなアナログの地図で目的地へ向かう羽目になるなんて。
「……どんな辺境に行くんだ僕ら」
ぼやいたスレインに、伊奈帆は前を見たままこう答える。
「僕らのことを、誰も知らないところだよ」
道の凹凸で車が跳ねる。浮いた体がシートに収まり、慣性運動で左右に揺れた。その間に、スレインの脳裏でこの数年の伊奈帆の行動が、パズルのピースのようにはまっていく。
家を買ったという話よりさらに前。そういや彼は言っていた。
――別の場所で、喧嘩できたら。
「まさか、本気だったのか」
「今日は四月一日だけど」
伊奈帆は肩を上下に揺らす。
「これは本当。冗談は好きじゃない」

「嘘つけ」
伊奈帆はくすりと笑った。
「うん。ま、冗談は嫌いじゃない。でも、これは冗談じゃない」
伊奈帆は、フロントガラスの上方に目を向ける。
「ここでの暮らしに、君がいればいいなって」
本気でそう思ってるんだ、と言う伊奈帆の向こう。サイドウィンドウに広がるのは青く高い空。雲の切れ間を、渡り鳥が横切った。ハンドルを握る指がトトン、と小さくリズムを刻む。
「余生はさ。のんびりしようよ」
「喧嘩でもして？」
スレインの軽口に、伊奈帆は、ははっと声を上げた。
「ま、そういうこと」

その家は、想像していたよりとても古い、木造の日本家屋だった。道の先に家が見えた時、伊奈帆は「うわあ、古いね」と運転しつつ声を上げた。自分が買った家だろう、と言うと、購入後、一度も来たことが無いと聞いてスレインは驚く。そして地図に目を落とす。

確かに、ふらっと来られる場所でもない。頻繁に僻地の極秘施設へ足を運んでいたのだし、僕が出所してからはなにくれと世話を焼いていた。無理もないか。

車を停めて荷物を運ぶ。前の住まいから持ってきたのは二シーズンの衣服の他、キッチンツールに食器類、風呂と掃除に使うもの、デジタル家電などである。玄関先にダンボールを積み上げて、まずは家の中を見て回ることにした。

「僕はキッチンを点検するから、部屋の扉を開けといて」

「わかった」

「いっぱいあるから、頑張って」

「いっぱい？　扉が？」

何のことかと思ったが、扉の正体がわかり、なるほどな、とスレインは納得した。横に開く扉は木でできているものと、木と紙でできているものがあり、壁と扉の二重の役割を果たしていた。つまり。家じゅうの壁を見て回らなくてはいけないということだ。

玄関から順に扉――後で聞いたが、〝フスマ〟という名称――を片端から開け放つ。

「あ、外」

襖の先は外。向こう側にも家が見えるから中庭か。

「わぁ……。そうか、そんな時期か」

そこには、若葉を覗かせる桜の木があった。薄紅の花が風に舞う様に目を奪われる。思わず足を踏み出すと、ギイ、と軋んだ床の音がした。スレインは不思議に思って首を傾げる。

「これ、通路が扉の外にあるのか？」

板張りの通路は外に面していて、驚くべきことに壁が無い。外、通路、壁、部屋という不思議な造りになっている。これも後で聞いた話だが、この通路は〝エンガワ〟という日本家屋特有のものだ。壁の多くは引き戸になっていて、全開にすれば外から部屋ま

で遮るものが何もなくなる。暗い部屋に光が溢れ、家が眠りから醒めたみたいに表情を変えた。スレインは縁側を辿っていく。面した中庭には、見頃を少しばかり過ぎた桜と手入れのされていない草花。どの部屋からも見える場所だし、後々綺麗にした方がいいだろう、と何とはなしに考える。

奥まった場所にあるのは風呂場だった。床が一段下がった場所の、タイルのひんやりとした感触。脱衣所には年代物の洗濯機があり、捜査パネルにはボタンではなく幾つかのダイヤルが並んでいる。床は白と焦茶、壁は薄青のタイル張り。継ぎ目は黒ずんで、あまり触りたくない感じだ。何となく、西欧のアパルトメントに趣が似ている。大きな違いは浴槽で、置き型のバスタブではなく床と壁に一体化していた。直線的で床より深く、これでは浴槽の花嫁は失敗に終わるだろうと連想し、思いつきに一人で吹き出す。シャワーはない。蛇口を捻ると、透明な水がちゃんと出る。赤錆びた水が出てくるかと思ったが、手入れはされているらしい。

「古いけど、思ってたよりかなり広い」

脱衣所の磨りガラスをガラガラ開けて、伊奈帆がひょっこり顔を出した。

「掃除に精が出そうだな」
「カビ用のお風呂洗剤を使いかねてたけど、持ってきて良かったね」
伊奈帆が洗濯機と湯沸かし器を点検する。どうやらちゃんと動くらしい。
「ゴミはないけど、古い分、染みついた汚れが多いね」
換気のため、スレインは高い位置の小窓を開こうと手をかける。が、ガタガタ音がするだけで引き戸は全く開かない。伊奈帆が隣に来て、二つの窓の重なった部分にある真鍮の金具をくるくると回す。棒を引き出すと小窓は開いた。鍵がかかっていたようだ。
「今日から暮らすってことだけど、本当か？ あ、水はちゃんと出たぞ」
「キッチンもそう。電気、ガスも大丈夫」
家電も大体、ちゃんと動く。伊奈帆の言葉に、キッチンにあった緑色の冷蔵庫と大きなガスコンロを思い出す。あれがまだ動くって？
「日本製は違うな」
「物作りが豊かな時代だったんだろうね」
そういうものの見方もあるのか、とスレインは変なところで感心した。

「ま、耐用年数はとっくに過ぎてるし、すぐに買い換えよう。他にも必要なものを揃えなきゃ」
伊奈帆は顎に手を当て壁のタイルをじっと眺める。頭の中に、必要物資のリストを作っているのだろう。
「今からどうする？　買い出しか？」
瞬きのタイミングでスレインが聞くと、伊奈帆は小窓に視線を向けた。正午の陽射しが浴室にチンダル現象を起こしている。
「先にお昼にしよう」

「それで？」
「何？」
「しらばっくれるな」

来る途中に買っていたコンビニのおにぎり、ペットボトルを広げた丸いローテーブル。角度にして九〇度の位置で、ぺりぺりとフィルムを剥がす伊奈帆にスレインは聞く。
「何のつもりで、こんな家を買ったんだ？」
今更といえば今更すぎる会話だが、なにせ機会が無かったのだ。極秘施設から軍営住宅に移送されたのが三年前。界塚伊奈帆が身元引受人となり同居が始まったのが三ヶ月前。彼が退役したのがつい三日前。
「……三が多いな」
「え？　何の話？」
「いや。だから、そもそもどういうつもりで家を買ったのかって聞いている。何年前だった？」
「五年前」
「僕に、それについて話したのは？」
「それも五年前。二〇一九年二月十二日」
「へ？　日付まで覚えてるのか？」

「僕にとっては大事な日だったし」
家を買った、という話を伊奈帆から聞いたのは面会室での一回きり。その後も何度か話題に出た気はするが、スレインは自分には関わりないと流していた。それが昨日になって、明日引っ越すと朝食の席で聞いたのだ。
「気に入らない？」
伊奈帆がおにぎり片手に聞いた。スレインは答えを考える間、しばらく食事に専念する。パッケージをよく見ずに選んだコンビニおにぎりの具は梅干しだった。酸っぱさに、思わず口がへの字になる。そのまま、リビング……というには馴染みのない部屋を見渡す。
食事と飲料の乗った木製の丸いローテーブル。飴色のタンス。天井近くの彫り物。草を編んでできた床。今は開け放たれている、鍵のかからない引き戸に覆われた四面。古い家の木の香りは独特だが、段階的な彩光の柔らかさと相まって、時間の流れがゆっくりとなる感じがする。
落ち着く場所だ、と息が漏れる。

「……いや、悪くない」
気に入らない、というわけでは決してない。どちらかというと、こういう場所は好きだ。静かで、穏やかで。季節の匂いが染み込んだ木の、香りが立ち込める古い家。急な引越しには驚いたものの、僕には荷物もほとんどないし。やりたいことも何もない。伊奈帆の行動に振り回されるのはいつものことだし、全くもって構わない。
気がかりなのは、何を考えてそれをしたのか、だ。
「まさか、僕のためとか言うんじゃないな？」
それなら、一発ぶん殴る。そう思ってスレインは伊奈帆を睨むように見据えた。同情や哀れみはごめんだ。彼の生き方を、僕のせいで曲げるのも。
伊奈帆は、ぱちくりと両目を瞬き吹き出した。
「まさか」
あまりにあっけらかんとした言い方だったので、スレインは拍子抜けした。伊奈帆はおにぎりを二つ食べ切って、ペットボトルの口を捻る。
「僕、やりたいことがあって」

「やりたいこと？」
うん、と頷き緑茶のボトルを傾ける。スレインは手と口を止めたまま、続く伊奈帆の言葉を待った。
「退役したら余生はこれをする、って」
余生。二十代半ばの青年にはあまりに似つかわしくない言葉。しかし、気持ちはよくわかる。僕だって、今は死ぬまでの時間を消費しているようなものだ、とスレインは思った。それにしても。
「お前、夢があったのか」
伊奈帆はまた肩をすくめた。
「夢っていうと気恥ずかしいけど。やりたい仕事がないわけじゃない」
幸い、お金の心配をしなくていいくらいのひと財産ができたから、と彼は言う。
「一人でやるのも大変だし。君が手伝ってくれたら助かる」
「こんなところまで連れてきて、今更な台詞だな」
「そういえばそうだね。じゃ、改めて。スレイン、つき合ってくれる？」

「まあ、いいけど。他にすることもないし」
スレインもおにぎりを平らげ、ボトルの蓋をキュッと捻った。緑のお茶は、米とよく合う。
肝心なことを聞いてなかった。
「お前のやりたい仕事って？」
「コック。ここで古民家カフェがやりたい」

[2019.2.12]

「ふうん」
「それだけ？」
極秘施設の面会室で発せられたスレインの生返事。反応が薄いことを不満に思い、伊奈帆は即座に問い返した。
「それだけ、って言われても」
スレインは瞼に沿ってぐるりと黒目を巡らせる。数秒間の沈黙。彼はやがて、首を傾げてこう言った。
「お前が家を買ったことと、僕に、何の関わりがあるんだ？」
虜囚である敗軍の敵将と、勝軍の将校。家族でも、幼馴染みでも、友だちだったわけでもない。赤の他人でかつての敵。そういう間柄の二人。スレインの言うことはもっともではある。

「細部や理由を聞きたくならない？」
「別に」
「僕は話したいんだけど」
「話せばいい」
「乗ってほしい。話に」
「……はぁ」
面倒くさい、とありありと顔に書き、スレインはテーブルに頬杖をつく。二人の間のチェスは序盤で、全ての駒が盤上にある。
「どこに家を買ったんだ？」
「詳しくは言えないけど、まあ、田舎」
「田舎暮らしか」
ふうん、と言って、また沈黙。伊奈帆の方からまた、口を開く。
「他には？」
「他には、って言われてもな……」

スレインは腕を組み、左斜め上空を見た。その仕草に、伊奈帆はコミックの吹き出しを連想する。もちろん、それで彼の思考が文字化されるわけではない。思っていることが見えたら苦労はないのにな、と非生産的なことを考えるくらいの間があった。
「うーんと……。どんな家だ？」
「古い家」
「へえ」
「まだ行ったことはないけど」
「は？」
「まとまった休みが取れないから。写真や動画で見て買った」
スレインが驚いた顔をしたので、伊奈帆は簡単な経緯を説明する。以前から物件を探していた。そうしたら、条件の良い平屋の一軒家が見つかった。想定以上にリーズナブルだが、かなり手を入れないと快適には過ごせない。せっかくだから今のうちに買っておいて、ゆっくりリノベーションしようと考えた、ということ。
一通り聞き、スレインはふうん、と頷いた。

「大きな買い物の割に、あっさりしてるな」
「まあね」
「そこに住むのか？」
「そのうちね」
「ふうん」
今日はふうんが多い。こんな反応は普段あまりないことなので、伊奈帆は興味深かった。
スレインが黙り込み、伊奈帆も何も言わない。チェスは放置されたまま、チェスメンはバラバラの方を向いている。しばらく、視線がそれぞれに緩慢に漂い時が過ぎた。
面会時間終了一分前のコールがあり、伊奈帆はようやく彼の名を呼ぶ。
「スレイン？」
スレインは一度かち合った視線をすっと横に外し、「いいんじゃないか」とぽつりと言った。

二〇二四年四月二日

目が覚めて、ここはどこかと考える。枕と布団の先に〝タタミ〟が見える。天井は木の板。壁がぼうっと光って見えるのは、〝ショウジ〟が朝日を透かしているからだ。

そうか。昨日、引越しをしたんだ。僕は。

スレインは起き上がり、布団を三段に畳んで壁面に寄せた。日の出前。室内の空気は薄く青く澄んでいて、時間が止まったみたいな静けさだ。障子戸を開けると、草と木の香りが朝露に濃く香る。黎明の空は、様々な色が混ざり合いながら移ろって美しく、僕は地球にいるんだな、とスレインは久しぶりに実感した。

外に面した通路を歩く。板床を裸足で踏むと、時々ギィ、と音がするのが面白い。そこから見える中庭に、小さな池と桜の木がある。少し荒れているが、薄明の中で眺めるそれは退廃的で美しいと感じた。

ガラ、と台所の引き戸を開く。コンロの前に伊奈帆の後ろ姿があった。台所の床は一段低くなっているので、彼の頭頂部が見えた。焦茶の髪が、朝日を赤っぽく照り返している。伊奈帆が肩越しに振り向く。
「おはよう。眠れた？」
「ああ」
湯気がたち昇る台所は、擦りガラスで朝の光がプリズムみたいに輝いている。味噌汁の匂いが古い家の匂いに交じって、スレインは大きな欠伸をひとつした。段差に腰かけ、膝で頬杖をつく。
「日本人は、床の上で寝るんだな。監獄にすらベッドがあるのに」
「新鮮？」
「ああ」
「その割に、裸足で平気なんだ？ 靴文化の人でしょ？」
ちら、と伊奈帆がスレインの素足を一瞥した。春とはいえ、朝と夜は肌寒い。しかもこの家は断熱という点において非常に弱い。隙間風だらけなのだ。

そんな中、パジャマ一枚素足で歩くなんて所業は、彼にしてみれば信じられない心地なのかもしれない。
「もう慣れた」
「君、適応能力高いよね」
「そうかもな」
伊奈帆が壁掛けのフライパンを取り、コンロに置いて火をつけた。半身を向けてこちらに問う。
「卵焼きと目玉焼き、どっちがいい？」
「選べるのか？」
「うん」
「じゃあ、目玉焼き」
「オーケー。先に顔洗ってきたら」
「うん」
伊奈帆は既に着替えているし、スレインも身支度をすることにして立ち上がる。

「あ」
洗面所に向かう背中に、珍しく驚いたような声が聞こえた。どうしたのかと振り向くと、伊奈帆はスレインの名を呼び、こっちこっちと手招きする。なんだかんだ長い付き合いだが、こんなにテンションが高い伊奈帆を見るのは初めてだ。
「スレイン、双子だ。ほら、来て見て」
「双子って？」
何のことかわからず、裸足のままで彼の隣に駆け寄った。フライパンには、小ぶりの黄身が二つ並んでいる。双子って、卵のことか。
「あ、すごい」
「ラッキーだね」
伊奈帆は菜箸片手に鼻唄なんか歌い始める。スレインはそんな彼の横顔を、しばらくぼうっと眺めてしまった。古い家の、光の射し込む台所。ひんやりとした空気に、卵の焼けるパチパチという音と軽い鼻歌。
スレインが、なんかいいな、と思っていると。

「あ、顔洗ってきたら」
「……そうするとこだ」
こういうところなんだよな、と思いつつ、スレインは縁側へ続く段を上がった。

「ここを、お座敷席にどうかな」
朝食後。タブレット片手に伊奈帆が聞く。開けた空間は畳の床で、キッチンと段差で続いている面には壁もドアもない。他の壁面の一つは襖が開いた状態で、他の二つは外に面した木の壁だ。
「この部分に壁を作って、居住エリアと店舗エリアを完全に分ける」
伊奈帆が襖を開閉しつつ、液晶画面の間取り図を見せる。中庭を中心として、アルファベットのL字を二つ、回転させて組み合わせたような形だ。
「今よりずっと、空調が効きやすくなる」
「なるほどな」

伊奈帆は踵を返し、段を下りて反対側に歩いていく。スレインも後を追った。伊奈帆の指が、さっきの図面の、左に倒れたL字の短辺部分を指す。

「奥の方は、テーブル席にどう？ 調理場からの動線はこんな感じ」

差し出されたタブレットを覗き込む。見取り図に矢印や簡単なコメントが書き込まれているそれを、スレインは興味深く眺める。中をくり抜いた正方形に近い建築。中庭部分に面した三辺は縁側が張り出しており、出入口からキッチンまでは地続きで、生活空間は一段高い作りになっている。

日本の伝統的な家屋はユニークだ。まず、鍵というものがほとんどない。襖を取り払えば広間になる。ホールのような、というのは大げさだが、大人数を一度に収容できるし、襖を利用してグループ単位で仕切ることも可能。通路からのアクセスも良く、飲食店には向いているのかもしれない。

「お前の好きにしたらいい」

先程の質問に、スレインはそう答える。こういうことには詳しくない。店をやるなんて、これまでの人生でこれっぽっちも考えたことはないのだ。

構想があるようだし、伊奈帆に任せるのがいいと思ったのだが。
「君のアドバイスが欲しい。照明とか、家具のセレクトとか。利便性は考えるけど、僕、雰囲気作りとか、そういうのは専門外だから」
言いつつ伊奈帆が肩を竦めた。インテリアか。伊奈帆の自室を見た事は一度もないが、私服からして機能的でシンプルなもの。それはそれで好ましいが、洒落っ気には縁遠そうではある。こちらも専門家というわけではないけれど、地球の各地を旅して回ったことはあるし、火星や揚陸城などの豪華絢爛な内装での生活経験もある。伊奈帆よりは、そういう引き出しは多いかもしれない。
「イメージはあるか？　客層とか」
「地域的に、ファミリーやお年寄りかな。落ち着けて、明るい感じがいい」
スレインは、幼い頃の旅の記憶を総ざらいした。色々な国に行ったけれど、伊奈帆のイメージなら、デンマークあたりのカフェが親しみやすくていいかもしれない。
「暖色灯にして、間接照明を入れるのは？　黒や白のシンプルなインテリアなら、モダンな感じになるんじゃないか」

「なるほど」
「でも、古いものも味があっていいと思う。ほら、チャブダイとか。使える家具は、剥げたところや掛けたところを繕って、よく磨くのがいい」
他にも色々、インテリアの材質や形などを思いついたまま話す。伊奈帆は小さく頷きつつ、タブレットに書き込んでいた。
「注文しとく。配置やなんかは、基本的に任せるよ。給仕するのは君だから」
「わかった」
伊奈帆は電子書類を表示して、項目の入力を始めた。手を入れるところが大体決まったので、業者に連絡するつもりなのだ。ここ数日住んでみて、家電の買い替えと水回りのリフォーム、そして防犯対策が必要だとわかった。
それにしても、とスレインは天井へ顔を向ける。紙と木でできた純和風の吊り下げランプを見て思う。古民家カフェ。昨日、初めて聞いた時には意味が全然分からなかった。説明を求めたものの、どうも要領を得ない。スレインの方から質問攻めにして、ようやく現状が理解できて今に至る。

「平和になったし、いいかなって。第二の人生っていうのがしたい」
要するに伊奈帆は、世界情勢から縁遠い田舎で、趣味半分の喫茶店を開きたい、ということらしかった。そんなことを引っ越した後で言われても、とスレインは呆れつつ、僕には何の不都合もないか、とつき合うことにした。だから伊奈帆に、お店のウエイターをやって、と言われあっさり頷いた。労働力として必要にされている、というのは気楽だ。
「工事含めて三ヶ月ってところかな」
「三ヶ月？」
問い返すと、伊奈帆はちらりとこちらに目を向けた。
「開店まで」
「すぐだな」
「前から考えていたことだから」
その言葉が、どうにも引っ掛かった。顔に出たらしく、伊奈帆が怪訝な顔で聞く。
「何？」

「どうして僕に言わなかった？　断ると思ったのか？」
「君が断るとは思わなかったな」
前もって言わなかったのはなぜか。僕を預かることで伊奈帆は軍人として微妙な立場にあったから、仕方ない部分はある。でも、わりと、こう……。信頼とまではいかなくても、それなりの関係だとは思っていたから。どうしても水臭いと思ってしまう。
伊奈帆は俯き加減で少し考え、やがて小さく首を振った。
「話さなかった理由はいくつかあるけど、……やっぱり、言いたくないかな」
「は？」
「嫌？」
「え？」
「僕とお店するの、嫌？」
「嫌ってわけじゃない。そもそも。お前が嫌なら、こんな所までのこのこついてきたりしない」
「よかった」

……上手くはぐらかされたな。
「業者の人が来る前に、買い出しに行こう」
伊奈帆がタブレットの操作を終えて言う。
「僕が運転する」
むしゃくしゃするので、車を飛ばして発散したいと考え間髪入れずに言ったスレインを、伊奈帆は怪訝な顔でじっと見る。何だ？
「スレイン。法定速度は知っている？」
「分かり切ったことを聞くな」
「いや。一応確認しないと」
しつこいな、と思いつつスレインは答える。
「時速八十五マイルだろう？」
「やっぱり」
溜め息とともに、伊奈帆はわざとらしく首を振る。さっきから、いちいち癇に障るやつだな。

「日本の一般道路の法定速度は六〇キロ」
「は？　うそだろう？」
「本当」
毎時八十五マイルは換算すると毎時百三十五キロメートル。六〇キロはその半分以下。いや、そんなことってあるか？
「そんなのろのろと……」
「しかも、この辺りは車線の少ない市街地。五〇キロってところかな」
「五〇だって⁉」
憂さ晴らしに、と思ったが、そんな速度じゃかえってストレスが溜まりそうだ。ということをスレインの表情から察し、伊奈帆が提案する。
「僕が運転しようか？」
「……いや。大丈夫だ」

ここでも共同生活をしていくのなら、ある程度の役割分担が欲しいところだ。伊奈帆の左目は視神経に繋がっていて視力をある程度補ってくれているが、とどのつまり義眼であるし。昨日も運転中や後、眉間に皺が寄っていた。頭痛を感じていたのだろう。

スレインは運転席に乗り込んだ。

「ほら。早く乗れ」

伊奈帆は観念した、という風に粛々と乗車し、シートベルトをカチリと閉めた。

「安全運転で頼むよ」

[2019.1.9]

西日の光に照らされた寝顔が別人のように見える。それはきっと、自然光の下で彼を見るのが初めてだから。

伊奈帆は壁際のパイプ椅子を引き寄せ、無機質なパイプベッドの枕元に腰を下ろした。漂白されたシーツは茜色に染まっている。赤い光に染まっているのは髪も、頬も、包帯も。擦り傷とガーゼが目立つ顔は蒼白だが、安らかに見える。それが無性に腹立たしい。

「……ぅ」

呻き声。瞼が震え、ゆっくり開く。

「スレイン？」

伊奈帆は覗き込んで名前を呼んだ。焦点が徐々に合い、眼差しに戸惑いと了解の色が広がる。

「……来たのか、お前」

「うん」
「いつ？」
「今さっき」
「そうか」
スレインは右腕を挙げようとして、腕のチューブに気付き顔を顰める。針が刺さった肘を伸ばし、反対側の腕を自身の額に乗せた。
「僕は、どのくらい眠っていた？」
「三日」
「そうか」
医務室に沈黙が降りる。目元を覆った傷だらけの顔を見下ろし、伊奈帆は唇を噛んだ。明日の昼には、捕虜虐待、という始末書が五枚提出されるはずだ。
いつかこんなことになるのでは、と危惧していた。止められなかった。守れなかった自身が歯痒い。考えたって仕方がないのに、どうしたら良かったのだろう、の答えを過去に探してしまう。

「何の用だ？」
スレインの声。彼は顔を腕で覆ったまま、首を少し動かした。唇が乾燥してひび割れている。
「お見舞い」
「ははっ」
今にも血が滲みそうな唇が、渇いた笑い声を放つ。
「大変だな、お前も」
それは軽口と言うには、哀れみを含んだ声色だった。
「厄介ごとを引き受けて。……僕だけじゃない。お前だって、そうやって自由を奪われている」
スレインの白い喉が、言葉を発する度に別の生き物のように動く。
「……いいんだ。やめても」
死んだりしない、と彼は小さく呟いた。
「やめるって、何を？」

「……」
「君に、言ってなかったことがあるんだ」
腕が顔から離れた。問いを含んだ瞳がこちらに向く。歪んだ口元は、今にも泣き出しそうに見えるし、今にも激しく怒り出しそうにも見える。こんな顔で、今、ずっと喋っていたんだ。
伊奈帆は膝の上で指を組む。
「僕は、セラムさんに頼まれるずっと前から、君のことを考えていた」
スレインが怪訝そうに眉根を寄せた。
「……ずっと前？」
うん、と伊奈帆は頷く。そして、スレインの胸元に視線を送った。シーツと包帯の間にあるはずのものを透かすように。
「そのペンダント。僕がずっと持っていた」
碧の双眸が見開かれる。
「お前の仕業だったのか」

彼がかつて、大切な人に託したもの。待たざるものが、唯一、人に与えられる形あるもの。時を経て、彼の手元に再び戻ったその理由。その全てをスレインは今、ようやく全て理解したのだ。

「君のところに戻って良かった」

伊奈帆は、かつて感じた鎖の感触や重さ、飾りの細工の凹凸の手触りや、光を受ける石の碧を思い出す。それを見て、考えていた様々も。

「それを見て、君のことを考えた」

何が君を動かしていて。

何をしようとしているのか。

あまりに不合理で、捨て身で、賭けにすらならないような行動の全て。そこまでするか。そこまでできるか。理を越えた何か。そのために自分の全てを委ねることが。

伊奈帆にはわからなかった。僕はしない。いや、できない。世界を変えることなんて。だって、おかしいんだ。世界を変えようとする人間が、その世界に居場所を求めてないなんて。

その理由が知りたかった。
伊奈帆は、痩せぎすで、不健康で、生傷だらけのベッドの上の青年を見る。その目に怒りも憎しみもない。感情の凪いだ瞳の表面は寂しそうに時折揺れる。
理由なんて、至極単純なことだ。今は、知っている。彼がなぜ、自分のいない世界のために戦ったのか。
それはたった一人のために。
利他というには悲壮にすぎる。エゴでしかないその生き方。それは決して綺麗じゃない。見苦しく、ある観点では醜いとさえ言っていい。
でも、と伊奈帆は瞼を閉じる。瞼の裏に、今はもうない義眼で見た残像がある。
白い鳥は、月の空を飛んでいた。
その戦い方が、あまりに透明だと感じた。その透明度は言ってみれば、魂の純度の高さ。彼の魂の在り方に、僕は圧倒されたんだ。
瞼を開く。スレインが静かな瞳でこちらを見ていた。彼は問いの形に唇を開く。
「それで？」

「それだけ」
「それだけ？」
僕の考えていたことを、言葉にして伝えられるわけでもない。
「うん。つまり僕は、君のことを考えるうち、君と話がしたいと思うようになった。それはこうして叶ったわけだけれど、君は、思っていたよりもずっと変わってるから。僕は面白がってここに来ている」
スレインがぽかん、と口を開けた。間抜けな顔につい吹き出しそうになる。不機嫌無愛想がすっかり板についているが、こんな顔もできるんだ。
「……なんだ、それ」
「君、気にしすぎだよ。いや、気を使いすぎ」
「お前が言うか？」
「僕は別に君に気なんか使ってない」
「……ふっ」
よかった。少し笑ってくれた。

スレインは点滴に繋がれていない方の腕を持ち上げた。
「どうしたの？　お水？」
彼はゆるゆる首を振る。
「……手」
「手？」
「お前の手」
差し出された手の意図を理解し、伊奈帆はスレインの手を、甲の側から右手で握る。予想外に熱い手だった。傷が熱を持っているのかもしれない。体温と裏腹な、静脈がはっきりと透ける死人のような腕の内側が見える。
スレインの指に力が籠り、親指と中指が彼の手に握り込まれる。
「……お前、生きてるんだな」
「それ、こっちの台詞だよ」
微笑みを交わし、僕らはそっと手を離す。
生きているんだ。それぞれに。

医務室を出て、扉を背にして手を見つめる。確かに触れた、あの手の温度。握り返す強い力。

スレインは生きている。生きてくれている。

できればずっと、と願ってしまう自分に気づく。

二〇二四年四月五日

「すごい音だな」
「まあ、工事ってそんなもんだよね」
引っ越し三日目に改修工事が始まった。外観とレイアウトは基本的にそのまま、主に水回りと電気系統を総入れ替えすることにした。壁や床、天井は残せるところは残しておいて、傷や汚れの目立つ部分は修繕をする。
先に店舗をやってしまおう、という伊奈帆の方針で、工事は店舗部分と居住部分で時期をずらし、一方ずつ施工することにした。店舗の工事にかかる期間は一ヶ月。その間は前時代的な民家部分のみで生活する。
「日本は地震が多いな」
「これはコンパクターの音だよ」
「コンパクター？」

「転圧装置」
「へえ」
それ以上聞くと話が長くなりそうだったので、スレインは生返事で軽く流した。しばらく、ドドドドド、という振動の中で緑茶を啜る。伊奈帆がふっと顔を上げた。
「スレインは、好きな重機は何？」
「は？ ジュウキ？」
「もしくは建機」
「工事用の車のことか？」
天井を見てスレインは考える。工事現場の機械といえば、カタフラクトのステイギスがまず浮かぶ。元々は月面基地建設用カタフラクトだったものを戦闘用に改造する、という発想は今考えても柔軟だ。騎士でありながら身分制の変革を目指し、身分の分け隔ての無い実力主義で兵士を登用する。地球に対する憎しみがあってさえ、僕に情を施してくれたもう一人の父。
立派な人物だった。しかし、もういない。

「スレイン？」
名前を呼ばれて我に返る。思考が逸れた。なんだっけ。重機か。地球のレトロな工事車両は何があったか……。
「クレーンかな。お前は？」
「モーターグレーダー」
「即答だな」
「メカが好きだから」
そういやこいつ、カタフラクトもこだわりがあったな、とスレインは思い返す。
「伊奈帆。色とフォルム、お前どっちが優先だ？」
「両方」
伊奈帆の重心が前に傾く。説明モードのスイッチが入ってしまった。
「あと、機能美。シンプルで分かりやすいデザインが好きだな」
ハンドジェスチャーで、かつての専用機について話し出す。重機の話よりこっちの方が面白い、とスレインも前のめりに相槌を打つ。地上戦では機動性重視で余計な装備を

一切外していた。宇宙戦は重さが無いからつけ放題だが、メモリ容量や装備の相性でタイムラグが発生する。バランスが重要だった、と伊奈帆は語る。
「僕と戦った時は、ごてごてとカスタマイズしていたけれど速かったな」
「左目が頑張ってくれたからね」
スレインの視線が伊奈帆の左眼に向く。月まで見えたという機械の瞳――アナリティカル・エンジン――。それも、今はもうない。
「君のやつ、好きだったよ。色も形も機能も」
タルシス。星の海を飛び、最後は地球の海へ落ちた機体。残骸がどこまで回収されたのかは知らない。
「僕も、好きだったな」
スレインの言葉に頷き、綺麗だった、と伊奈帆は言った。その後小さく呟いた言葉を耳が拾う。
――鳥みたいで。

二〇二四年四月一〇日

花があってもいいな、と言った。

「中庭の木は、サクラだろう？ その周りに、夏や秋、冬の花を植えれば一年中綺麗にできると思うんだ」

食事は、台所すぐの座敷で二人一緒に食べる。朝の食卓で、その日のスケジュールを決めるのが日課になった。一昨日はメニュー案を考え、買い出しをして試食会。昨日はドリンクを決めて試飲会。その日の予定をその日に決める。その日暮らしというと意味が変わってしまうけれど、今日のことを今日決める、というのはなんとも長閑なことだとスレインは思う。伊奈帆も同じように感じているだろう。実際、昨夜「長閑だなあ」と風呂で彼は言っていた。

「それもそうだね」

伊奈帆もうんと頷いて、コーヒーのマグを口に運ぶ。今朝のメニューは卵サンドとサラダにコーヒー。

「卵サンド、からしは入れた方がいいかな」

「僕はあった方が好きだけど、ファミリー向けなら、なくていいんじゃないか。それか、オーダーの時に選ぶようにするか」

「なるほど。そうしようかな」

試食と試飲でおおよそ決まった、セットメニューを毎食試すことにしたのだ。これも長閑なことである。一通りのメニューが出そろったら、テーブルウェアを注文することになっている。

こんな暮らしがあるんだな。そう思いつつ、スレインはコーヒーを啜る。ちらりとみると、伊奈帆は同じコーヒーを牛乳で割っていた。このコーヒー、僕には丁度いいけれど、お客さんに出すには少し濃すぎるかもしれないな。

朝食後、二人でホームセンターへ向かった。車で片道二〇分。巨大な看板は、緑にアルファベットが白く抜かれた店名が爽やかだ。エントランスにずらりと並ぶ育苗ポット。ほころび始めた色とりどりの花々は水やりの直後なのか、きらきらしく雫を纏っていた。

「何がいるの？」

「花の苗と、土と、肥料と、あとは道具だな」

店先。スーパーマーケットの二倍以上の容積はある巨大なカートを、伊奈帆は列から引き出す。

まず、土。肥料。ホール状の散水ホースとジョウロを二種類。支柱などをどんどんカートに入れていく。自家用車はステーションワゴンで、ラゲッジは大きめだ。まあ、このくらい楽に入るだろうとスレインは楽観する。

「そうだ。店先にも植えたい」

道具が大体揃ったところで、スレインは言った。伊奈帆は軽く頷く。

「うん」

「直植えできればいいけれど……。一応、プランターも見ていいか？」

「もちろん」
長方形の白いプランターを四つ選び、スレインはダンボールのトレイを持った。花の陳列エリアへと足を踏み入れる。
「何を植えるの？」
伊奈帆が斜め後ろから聞いた。カートが大きく、通路を列になって歩いているためだ。
「春はなんでも。ミモザ、アリウム、ラナンキュラス、キンセンカ……。食用なら、ナノハナやカモミールもいい」
ヒュ、と伊奈帆は小さく口笛を吹く。
「へえ。すごいね」
「何がだ？」
伊奈帆は視線を左右に向けた。色とりどりの花の蕾が並んでいる。
「詳しいなって。僕は、今君が言った中で菜の花くらいしか分からないよ」
「そうか？ 他に、お前が知ってる花の名前は？」
「桜、朝顔、ひまわり」

「あとは？」
「あとは……」
空を見上げて考えを巡らす伊奈帆を見て、つい数日前のやり取りを思い出す。重機について聞かれた時、僕もこんな風な顔をしていたのだろう。
「菊とか、コスモス……。ユリ……、それとバラ」
「バラか」
見渡すと、少し遠くに薔薇の苗が見えた。移動し、花の状態と値段を見る。健康そうないい苗だ。
「少し値が張るけど、いいか？」
「予算内。色は？」
ざっと見ると、色の種類は赤、ピンク、黄色、白。それと……。
「じゃあ……」

[2021.2.5]

思いがけず開いた瞼に、一瞬言葉を失った。伊奈帆はできる限りゆっくり、静かに、瞬きをして口を開く。

「やあ。僕がわかる？」

「……クソオレンジ」

苦々しい顔で口を歪めたスレインにほっとして、そっと右手を引き戻す。

「減らず口は元気みたいだ」

ふん、と鼻を鳴らすが、すぐにゴホゴホ咳き込んだ。サイドテーブルの吸い飲みを手渡す。こくこく、と華奢な喉仏が上下した。

何も言わず、やり過ごせそうだと思いほっとする。寝ている彼の、髪に触れていたことを。

極秘施設の医務室で、こうして彼が目覚めるのを待つ。何度目だろう、と伊奈帆は考える。時が経つにつれ、頻度は多くなっている。

終戦から五年。世界というのは、想定以上に過去を忘れてくれないらしい。平和に必要なのは、戦争の終結だけではない。むしろ、それからが正念場だと。頭ではわかっていたことを伊奈帆はまざまざと思い知った。

軍人一人にできることには限りがある。目の前の囚人一人の処遇すらままならない。彼の未来や自由はおろか、命を繋ぐことさえも。

世界を変えるなんて途方もない。

伊奈帆はベッドを見下ろす。目覚めたばかりで、ぼんやりとした表情で緩慢に瞬きをする青年の顔を。

世界を変える。彼はそれをしようとしたのだ。そしてきっと、僕がいなければ、それは実現しただろう。

スレインの顔に、怒りも憎しみも微塵もない。感情の凪いだ表情は、日を追うごとに透明になる。

どうしてだろう、と考える。憎くはないのか。怒りはないのか。声を荒げて泣き叫んでいいのに。それを受け止めることしか、今の僕にはできないのに。

「……お前、もう来るなよ」

スレインが掠れた声で呟いた。吐息に近い、消え入りそうな声だった。伊奈帆は膝の上の拳を静かに握りしめる。

「どうして？」

絞り出すように声にできたのは問いだけ。スレインは伊奈帆を一瞥し、天井を見たまま答えた。

「言いたくない」

「それじゃあわからないよ」

「……」

理由はいくつもある。伊奈帆の頭に、一番恐ろしいもの、一番嫌だと思うものから順に浮かぶ。

「君の理由に納得できれば、善処する」

僕のせいだ、と。直接彼の口から聞くのは辛いが、聞かなければいけないと思う。
「……はぁ」
スレインは大きな溜息をつき、瞼をゆっくり開閉した。視線を上へと向けたまま、細く小さく唇を動かす。
「……お前は、普通の暮らしができるだろう？」
想定していない言葉だった。
「どういうこと？」
伊奈帆は前のめりになり、覗き込むような姿勢になる。一瞬目が合い、スレインは視線を壁に滑らせた。
「戦争は終わった。軍人なんかやめればいい。向いてないぞ」
また、思いがけない言葉。あれだけの戦闘を交え、僕に軍人が向いてない、と。スレインがそう思っていたのが驚きだった。戦時中は、軍神とまで言われたのだ。
「そんなの初めて言われたよ」
スレインは寝返りを打ち、背中を向けた。白いはずの壁の色がくすんで見える。

「僕にかまうな。もう」
「それはできない」
考えるより先に伊奈帆の口から言葉が出た。その理由を言葉に変換するのに手間取る。何を言っても、哀れみや同情と取られてしまう気がした。そんなことは絶対ないのに。僕らの立場はどこまでも均等で、危うくて、たとえば過去の選択肢一つでひっくり返ってしまうものだから。
君は、僕だったかもしれない。僕は、君だったかもしれないんだ。僕は僕に会いに来ているのかもしれないと。そう思う。でも。
「僕の喧嘩を買ってくれる人、いないんだ。君くらい」
結局のところ、言葉としてはこんなのしか出てこない。
「ふざけてるのか？」
スレインが肩越しに睨む。伊奈帆は三白眼を真っ直ぐ見返す。
「ほら。ね？ 喧嘩しに来てるって、僕、前にも言ったよね」
「……このクソオレンジ」

「バカコウモリ」
「はあ⁉」
うっ、と呻いて枕に頭がぼすんと落ちる。固まった肩に伊奈帆は右手を置いた。びく、と一度震えた肩は、骨の感触が強いが想像よりも弱々しくない。
「大声出すと傷が開くよ」
「誰のせいだと……」
「それはごめん」
触れた肩から手を離す。スレインは体を仰向けにした。
「でも、冗談抜きで。これは前にも言ったけど、僕は君を面白がって勝手に来ている」
ふん、とスレインは鼻を鳴らした。
「そんなの真に受けるほど馬鹿じゃない」
純な反応に、伊奈帆は思わずくすりと笑う。笑い声に睨みが返るが、その鋭さが心地よい。
「君のおかげで、僕の方が救われてるんだ」

自然と言葉にできたことに驚く。
「これはエゴだよ」
交錯する視線。スレインの瞳が湖面のように静かに揺らいだ。
「……お前、それでいいのか」
「うん」
時間だ。立ち上がる。伊奈帆は、はだけたスレインのかけ布を肩までたくし上げた。点滴のチューブを絡まないよう整え、水差しから吸い飲みへ水を補充する。これはもう、すっかり慣れたいつものこと。水を満たしたポリカーボネイトの吸い飲み。その曲面に、外の光が映り込んでオレンジ色に染まっている。
空の色を感じられるのが、死にかけた時だけなんて。
美しい水色に、伊奈帆は複雑な気持ちになる。そしてぽつりと呟いた。
「でも。そのうち、別の場所で喧嘩できたらいいなとは思う」
「別の場所？」
「うん」

少し迷ったが、伊奈帆はスレインの手に触れた。肩に触った時のような震えはなく、スレインは不思議そうな目で見返すだけだった。
「時間だ。また来るよ」
手を離す。スレインの手が、だらんとベッド脇に垂れ下がった。
「もう来るな」
「今日って四月一日だっけ？」
「早く消えろ！」
「じゃあね。バイバイ」
部屋を出て、振り向かずに扉を閉める。ドアノブを握ったまま伊奈帆は呟く。
「別の場所、か」
君のことも、僕のことも。大きな戦争のことも知らない、時間に取り残されたような場所。そんな場所ならきっと僕ら、楽しく喧嘩ができるだろう。

二〇二四年五月六日

スレインが洗濯物を取り込んでいると、車のエンジン音が近づいてきた。
買い出しに行く、と伊奈帆が出かけておよそ五時間。洗濯物を干してすっかり乾くまでの時間が経過した。最寄りの大型ショッピングセンターまで車で片道二十分ほどなのに、やけに長いと思っていたが。
「どうした、それ？」
スレインは近づきながら聞いた。伊奈帆は納屋から台車を持ってきて、車のラゲッジから買ってきたものを移動している。数種類のペンキ缶。サイズの異なる四つの刷毛。ヤスリに金具。野外用の飾り紐など……。
「今日は看板作ろうと思って」
「看板か」

最後に大きな木板が現れた。おや、とスレインは眉を上げる。その板は楕円形で、端々が滑らかに処理されている。
「やけに綺麗だな」
「これは今作ってきた」
「作ってきた？」
「作業所借りて、成形してきた」
スレインは指の腹で木の縁をすっとなぞる。滑らかで柔らかな木の感触が伝わった。
「こんなこともできたのか、お前」
「高校の授業ぶり。旋盤とかさ、懐かしいよ」
「へえ」
看板は二種類、と伊奈帆は指をピースサインにする。店名と、営業中準備中の裏表。他にも、元々あった木製の椅子やベンチを塗り直そうということで、二人で納屋の奥から出した。並べると、なかなかの量だ。大量のペンキも頒ける、とスレインは腕を組む。
「はいこれ。着替えて」

伊奈帆から真新しいつなぎの作業着を手渡され、スレインは意味がわからず問い返す。
「着替える？　なんで？」
「その服、二度と着られなくなるよ」
思いもよらないところが汚れる。着替えた方が手っ取り早いと言いながら、伊奈帆が軍手を差し出した。
「ペンキ塗り、したことある？」
「ないけど……」
「だと思った」
伊奈帆はカラッと明るく笑った。
「君は好きだと思う。楽しいよ。あ、ご飯たべた？」
「まだ。忘れていた」
小言があるかな、とスレインはちらりと思ったが、伊奈帆は僕もまだ、と軽く言った。
「先に腹ごしらえしよう」

つなぎを腕に引っ掛け、家に入った。住まいの古いキッチンで、伊奈帆は屈んで緑色の冷蔵庫から食材を取り出す。まだ居住エリアの家電は買い替えていない。つまりあの、何十年も前の年代物の冷蔵庫やら洗濯機やら湯沸かし器やらを使用していた。多少不便だが使えるし、改装後に新しいものを選んで購入した方が手間は無い、という理由だ。だから二人は、引っ越しこのかた一世紀前のような生活をしている。

「タイムスリップしたみたいだ」

「え？」

スレインも全く同じことを考えていたので、伊奈帆の言葉に驚いて大きな声が出てしまった。伊奈帆は振り向いて笑った。現代風のシンプルな片手鍋にザー、と水を入れる伊奈帆の傍ら、調理台には袋麺と、ネギ、ハム、二つの卵が並んでいる。それを見てスレインは食器棚からどんぶりと箸を二つずつ取り出した。鍋も食器も、前の家から持ってきたものだ。僕の部屋にあった調理道具や食器がここにあるのが不思議な感じだ、とスレインは思う。

「知ってる？ インスタントラーメンは一九五八年に初めて発売されたんだって」

伊奈帆がネギを刻みながら言った。
「え？　そんなに前から？」
驚いて、袋麺を開ける手を止めてしまう。
「ほら、それだよ」
伊奈帆が指さすスレインの手の中には、白と茶色のストライプ地にひよこが描かれたパッケージの袋麺。いつか、伊奈帆がくれた〝ゴアイサツ〟と同じものだ。
「これが？」
僕は二つのどんぶりに麺を開け、ハムを乗せ、麺の窪みに卵を割り入れる。伊奈帆が刻んだネギを横からちゃっと入れた。
「もしかしたら。前この家に住んでいた人も、お湯を沸かして食べたかもしれないね」
「……そうかもしれないな」
言っているうちに、鍋の湯がぐつぐつ煮立つ。伊奈帆はコンロの火を止めて、沸騰した湯をどんぶりに注ぐ。透明な白身がさあっと白く変わり、いい匂いが湯気になって漂った。蓋はないので、アルミホイルを上にかぶせる。

「すごおいしい。すごくおいしい」
「ははっ、確かに」
伊奈帆がどんぶりを運ぶ間にスレインは冷蔵庫から麦茶を取り出し、コップも持って居間へ移動。二人はちゃぶ台で向かい合って、手を合わせてからアルミホイルの蓋を開けた。

二〇二四年六月一〇日

晴れた日になった。
「この長机は、どちらに？」
「それはあっちへ。お座敷用です」
伊奈帆が軍手の人差し指を段差の上の座敷に向けた。
「食器類は厨房へ。カウンターの椅子はバミりのところへ」
「このソファは？」
「奥の壁際で、四角いテーブルセットと一緒にお願いします。スレイン、案内して」
「こちらです」
店舗用の家具や機材の搬入日。店舗部分の改築が済み、いよいよ本格的に店を構えることになった。
「冷蔵庫が二つありますが」

「大きい方はあの上の、アース線のところ。小さい方はそこです」
伊奈帆が業者に指示をし、あらかじめ考えていた配置にそれぞれを収めていく。がらんとしていた空間が徐々に店らしくなり、全てを終える頃には、室内はすっかり様変わりしていた。
「いい感じだよね」
トラックのエンジン音を背景に、顎の汗を拭いながら伊奈帆が言った。出入口から室内を見渡す。正面にカウンター席が六つ。厨房のタイルは薄青で、巨大な換気扇が傘のように下がっていた。左手には一段高い座敷席があり、新しい畳に、新しい木製の長机といつも食事に使っていた古いちゃぶ台が一つ。
右手すぐには手洗いがあり、間取りで左に倒したL字の短辺にあたる四つのテーブル席は、外の光で明るく照らし出されている。壁面は民家の造りを利用した大きなガラス戸であり、そこからスレインが手入れした中庭が一望できる。
「うん。昨日までは家だったけど、今は店って感じがする」
「そうだね。あのさ、スレイン。せっかくだから、ここでお昼にしようよ」

材料を取ってくる。と伊奈帆はテーブル席のガラス戸を開き、中庭から縁側を伝い、住まいの方へ走っていった。

スレインはドリンク用の器具を眺める。電気ケトルとコンロ用のケトルが二つずつ。ティー用品が一〇セット。コーヒー器具はフレンチプレス、ドリッパー、サイフォン。棚に仕舞ったコーヒー豆や茶葉は、頼んだものがちゃんとある。

電気ケトルのコンセントを確認し、容器に水を入れていると伊奈帆が戻ってきた。業務用の大きいボウルを小脇に抱えている。食材を揃えてきたらしい。スレインはケトルのスイッチを入れ、カウンターに腰かけた。

「ご注文は？」

厨房で、伊奈帆が咳はらいを一つして聞いた。ジーンズに長袖Tシャツの腕まくりというラフな私服姿だが、なかなか様になっている。カウンターに肘を置いてスレインは聞き返す。

「何があるんだ？」

「ハムサンドか、炒り卵サンド」

「じゃあ、卵のほう」
「少々お時間いただきます」
「ぷっ」
カチ、と湯の沸く音がしたのでスレインは席を立ち、キッチンの内側に入る。コンロはカウンター側だが、ドリンク類は壁側だ。調理の時は互い違いに並ぶ格好になる。
「コーヒーと紅茶。どちらになさいますか？」
スレインが肩越しに聞くと、伊奈帆は卵をボウルに割り入れながらこう聞き返す。
「カフェオレはできますか？」
「かしこまりました」
会釈をすると、伊奈帆の口の端が小さく上がった。
「かっこいい。さすが」
「……まあ、年季が違うからな」
冷蔵庫を開くと、牛乳がちゃんとあった。それに気づいた伊奈帆がくすっと笑い、フライパンを傾ける。黄金色の卵液を投入。バターと卵のいい匂いに、腹の虫が時間差で

二回小さく鳴った。

[2021.3.31]

「は？　え？　界塚？　なんで？」
目を丸くして、伊奈帆とその背後と、自身の背後を見回すスレインに、伊奈帆は両手で紙袋を差し出した。
「これ、つまらないものですが」
「へ？　なんだ？　これ」
「引越しの挨拶だよ」
袋の文字は右肩上がりの「御挨拶」。これは先ほど、筆ペンで伊奈帆が書いたものだ。スレインは動きを止めたまま目を丸くしており、漫画なんかなら、頭の上に疑問符がぽんぽんと浮かんでいるだろう、と伊奈帆は思った。その様子を眺めているのも微笑ましく面白いが、全く話が進まない。伊奈帆はふう、と息を吐く。

「とりあえず、これ、受け取って」
スレインは素直に両手で受け取り、「御挨拶」の文字に視線を落とした。
「お湯を注ぐだけだから。どんぶりとかある？ 卵を入れるのが定番だけど」
やがて、スレインは困った顔でぽつりと聞いた。
「えっと……。どういうことだ？」
くすり、と笑みが漏れてしまう。少し意地悪だったか。いけないな。僕一人が浮かれてちゃ。
こほん、と一つ咳をはらって、伊奈帆は告げた。
「お隣さんだよ」
「は？」
集合住宅の通路。開いた扉の内と外で向かい合って早数分。伊奈帆は一歩踏み出した。
「驚くのも仕方ないけど、とりあえず中に入れて」
スレインはぽかんと口を開き、次にこくりと頷いた。洗練された所作で手が翻り、その動きに伊奈帆は、お、と思う。

「ああ、……まあ、どうぞ」
手の先に室内が見えた。カーテンはまだない。物の少ない明るい部屋だ。伊奈帆は玄関に足を踏み入れる。
「お邪魔します」
ドアクローザーがゆっくりと扉を閉じる。バタン、ガチャガチャリ、とオートロックが作動した。

「ほら」
「あ、どうも。お構いなく」
スレインが差し出したマグカップを、伊奈帆は決まり文句を返しつつ受け取る。温度管理が良いのだろう、湯気が柔らかい。スレインがお茶の準備をするところをそれとなく見ていたが、ありふれた市販品のティーバッグなのに、水色は澄み、香りもよく出て

いる。意外な特技に感心しつつ、伊奈帆はカップを口に運んだ。温度もちょうど良く、甘みが出ていて気持ちがほぐれる。
「説明はあるのか？」
スレインが聞いた。伊奈帆はマグをテーブルに置く。
「うん。つまり、監視員」
ああ、とスレインが大きく頷く。事情を大体察したらしい。彼は自分のマグを引き寄せて、ぐび、と一口飲み込んだ。ブルーの開襟シャツから覗く喉仏が上下する。相変わらず華奢だが、前よりずっと健康そうに見える。
「もう少し詳しく聞けるのか？」
スレインが真面目な顔で聞いた。伊奈帆はこくりと頷く。
「軍の管理下であること。それが条件」
今度はスレインが頷いた。
「それは知っている。外出は許可制。二十四時間体制で監視員がつくことも聞いた。それがお前？」

伊奈帆もまた頷き返す。
話の先を示すため、伊奈帆は室内にぐるりと首を巡らせた。
「ここ、軍の社宅でもあるんだ。僕は別のところに住んでたんだけど、監視員として隣に越してきたってわけ。だからお隣さん」
スレインも室内を見回し、考え深く瞳を落とした。待つ間に飲んだ紅茶は少し温くなっている。
「なにか質問はある？」
スレインの複雑そうな表情に、気遣いが感じられる。終戦からもう五年。そんなこともわかるくらいの付き合いなのだ、僕たちは。釈放とはいえ、完全に自由の身の上というわけではない。スレインが自分の裁量でできることには、かなり厳しい制限がある。仕方のないことではあるが。
「界塚。お前、それでいいのか？」
「この仕事？　僕が希望したんだ」
「どうして？」

スレインは自分のせいだと思っている。僕を巻き込むことに、申し訳なさを感じているのだろう。施設でよくあった、露悪的で突き放した物言いもそのため。どこまでも他人を先に考えて、自分で全部背負い込む。

だから僕も放っておけない。それは同情でも哀れみでもなく、そう。ただ――。

伊奈帆は紅茶を一口飲んで、説明のため口を開く。

「極秘施設、遠かったから。一人暮らしになった事だし、それなら社宅でいいかなって」

「一人暮らし？」

「姉貴、結婚したんだ」

スレインが目を丸くした。猫目も丸くなるんだな。

「へえ。それは……。おめでとう」

「ありがとう」

会話が途切れる。極秘施設での廃人寸前の姿を知っているから心配していたが、伊奈帆は部屋の中を眺め、ほんの少し安心した。リビングと一続きのキッチンに、生活感が

ちゃんとある。物は必要最低限だが、一通りの家事はきちんとしているらしい。普通に生きていることがこんなに安心するなんて、と伊奈帆は自身の心情を新鮮に感じた。
スレインが、あ、と声を上げた。
「そういえば、前に家を買ったとか言ってなかったか？」
「ああ。うん」
覚えてたんだ、と頬が緩む。こんなことが嬉しいなんて、これもまた、不思議な変化だと思いつつ。
「そっちはいいのか？」
引っ越すのならそちらに、という意味で聞いたのだろう。場所についても話していないし。確かに、引越しの機会に買った家に住まないのは、彼にしたら不思議だろうな。
「すごく古いから色々直す必要があって、まだ手をつけてないんだ。掃除だけ業者にお願いしてるところ」
どういう家にしたいか決めかねている、と伊奈帆は付け加える。
「ふうん」

また、ふうん。背中を丸めて頬杖をつく様が猫みたいだ。
「老後の楽しみにね」
「老後か」
「笑うところ。ま、余生はそこで過ごすつもり」
「余生か」
スレインはそこで小さく声を漏らした。
「僕にとっては、今が余生みたいなものだ」
笑ったらしいが、笑顔にしては下手すぎる、と伊奈帆は思った。
「それ、笑うところ？」
伊奈帆のジョークに、スレインは片目を細め、口の端をぐい、と曲げた。

二〇二四年六月十四日

田舎暮らしも二ヶ月だ。今日は朝食後、伊奈帆は買い出しと言い残し、一人で外出していった。スレインは食器の後片付けに花の手入れや洗濯物、整理整頓を済ませ、時計を見た。まだ午前九時。時間が経つのが遅いな、と思い、自然とキッチンに足が向く。誰もいないことを確認し、スレインはため息をつく。一人だと退屈だ。

居住エリアも工事を終えて、家電も全て買い替えた。シンプルで現代的に様変わりしたオープンキッチンを眺めていると、かつての光景が思い出される。タイル張りの流し。ぐるぐる開ける木の小窓。大きな稼働音のする緑の冷蔵庫、一度では絶対に火がつかないガスコンロ。不便だったが、それなりに楽しかった。

やることは終わってしまったし、今から何をしようか。リビングに突っ立ったまま考えていると、中庭の先が目に留まる。

「……店も掃除しておくか。昨日もしたけど」

スレインは掃除道具をまとめ、靴を履いて外に出た。外周に沿って店の出入り口に向かう。誰もいないテーブル席が、ガラス戸の向こうに見える。ここにお客さんが座って、伊奈帆の作った料理と、僕の作った飲み物を口に運ぶのか。夫婦や親子連れ。恋人同士、友だちと。それとも一人で……。なんにせよ、その人たちが「美味しかった」って笑って帰れるようにしないと。

ガラン、と響いた音に驚きスレインは上を見る。真鍮製のベルが、ドアの上部で揺れていた。あいつ、いつの間にドアベルなんてつけたのだろう。伊奈帆はちょくちょく一人で買い出しに行き、ＤＩＹに精を出しているのだ。看板、ベンチ、子ども用の食事椅子、取り付け棚……。

今日は何を考えついたのやら。何にせよ器用なやつだ、と思いつつ、スレインは店内に足を踏み入れる。

リフォーム済みの厨房。整然と並ぶキッチンツール。観葉植物に照明器具。業者が入り、そこら中をすっかり綺麗にしてくれたのが四日前のこと。掃除といっても、するこ

とはあまりない。とりあえず机や椅子の拭き掃除からやろうと、スレインは蛇口を開く。バケツに水を溜め、布巾をギュッと固く絞った。布巾を滑らせるカウンターは一枚板だ。飴色で、あちこち凹みや傷がある。

ここで、店をやるんだな。あいつと。

家屋が日本風で馴染みないせいか、どうも現実感がない。まるで別の世界に来たような、変な感じだ。古い建物の内部に並ぶ家具は、古いものと新しいものが半分ずつ。まだ傷の無いテーブルセットやカウンター椅子は、古い壁面や床に照り返す光の中で深海のように調和しており、そこに、伊奈帆の作った家具が自然と溶け込んでいる。彼の手仕事が店と住まいのあちこちに息づき、古いものと新しいものの仲立ちをしているのかもしれない。

美しいが、切ない場所だ、とスレインは思う。この家の持つ記憶は、僕の生きてきた時間よりずっとずっと長い。家が建てられてからいくつもの戦争があり、何人もの人がこの場所を訪れ、そして去って行ったはず。

誰だって、平和な世界を望んでいる。

しかし、とスレインはカウンターの美しい木目を見て考える。
誰かの日常は、誰かの犠牲の上にある。そのつり合いが、平和だということならば。
僕は、その天秤を誤ったのだろう。
どうしようもなく不釣り合いな幸と不幸。躊躇いはあった。しかし、僕にはそれしか選ぶことはできなかった。
今なら、どうするのだろう。
スレインはそっと目を伏せる。わかりきっている。
今でもきっと、それしか選べないのだ。僕は。何度繰り返しても、きっと。その在り様には罪、という言葉が相応しい。大きなガラス窓の外。混じり気のない青い空が光を放ち、格子の形の影を落とす。
いいのだろうか。幸せになって。

「ふうん」

夕食の席。元気がないねと言われたから、スレインは昼間考えていたことを話した。伊奈帆は先の返答の後、おかずを咀嚼し飲み込んで、箸を置いてお茶を啜る。

「君は、もう十分苦しんだと思うけど」

スレインは眉を寄せる。伊奈帆は表情を変えず、言葉を続けた。

「僕が君に出会ってからも。僕が君に出会う前も」

伊奈帆はそこで一度、目を閉じた。伏せ目に瞼を開き、逡巡するかのようにゆっくりと、彼の視線がこちらに向く。

「スレイン。幸せになろうとしたこと、ないでしょ？」

しん、しん、と沈黙が堆積する。スレインは、真新しい壁紙の幾何学模様の凹凸を追う。ペンダントライトが暖色に照らす壁も床も、清潔で明るい。家庭料理の並ぶ食卓は豊かで温かい。器の多くは前の住まいからの持ち物で、改装工事が完了した際、伊奈帆の提案で箸だけを新しくした。

スレインは箸を使う自分の手を見る。初めて使ったのは数年前。最初は上手く使えなくて、食べ物に突き刺したら伊奈帆にネチネチ小言を言われた。

思い出すと笑えてくる。そして気づく。
僕、変わったんだな。そんな些細な思い出で笑えるくらい。自分の事を笑えるくらい。
「そうかもしれない」
静けさの積もる部屋で、僕はようやく思い至った。
「そうか。僕は、幸せが怖いんだ」
伊奈帆が机の上で指を組む。大事なことを話す時、彼はいつも指を組むんだ。
「……贖罪の意識が消えないのはわかるけど」
お前に何がわかる、って。以前なら、そうやって食ってかかったかもしれない。でも僕は、伊奈帆の言葉をとても自然に受け入れた。木の匂い。料理の匂い。古い家の不思議な匂い。そういうものが言葉の角を和らげていくのかもしれない。
「君が幸せか不幸かなんて、一体誰がわかると思う？」
「誰って……」
伊奈帆の指がぐっ、と白く力むのが見える。
「僕だよ。僕だけ」

この世界中で、僕だけ。その声は、密やかに、独白のように耳に届く。
「僕は、君には笑ってほしい。幸せでいてほしい。いつもじゃなくていいけど、できるだけ。色んなことでぐちゃぐちゃになって、怒ったり泣いたりしてもいい。でも、最後は笑ってくれたらな、って」
伊奈帆は、真っ直ぐな目でこちらを見つめた。左の義眼に美しさを感じるほど、真摯な表情で。
「そのために、僕にできることはある？」
僕は、嬉しいのか、腹が立つのか、申し訳なさから来るのかわからない苛立ちと、とても大きな安堵を感じた。
伊奈帆は、そうか。いつもそれを考えていたんだ。やっとわかった。今更だけれど。
「今のままで充分だ」
僕が言葉にできたのはそれだけだ。でも、彼はくしゃりと笑ってくれた。
「僕も、今が充分」

伊奈帆は中庭に顔を向けた。葉桜の濃い緑は星空に影となり、初夏の蕾が波のように部屋の光を受けている。
「お花、いい感じだね。いつ見頃？」
「もうすぐ。一ヶ月後くらいかな」
「じゃあ、来月頭に開店しよう」
彼が言い、僕はそれに頷いた。

[2023.12.23]

「塩、しょうゆ、みそ、ちゃんこ……。キムチ、チゲ、豆乳。……あ、トマトだって」
「こんなに沢山種類があるのか」
スレインは言いつつ陳列棚を眺める。ずらりと並ぶ、パウチされた鍋の素。「今日、鍋パしない？」と伊奈帆に声をかけられ、近場のスーパーへ連れ立って買い出しに来たのだ。
「どれにする？」
カートの持ち手を握った伊奈帆が聞いた。二段カートの買い物カゴにはまだ何も入っていない。先に鍋の種類を決めてから具材を買うんだ、と言う彼に連れられ、真っ直ぐきたのが鍋コーナーだった。
「よくわからない。お前の好みで決めてくれ」

いくつかは味の想像もつかない。とりあえず、食べられればなんでもいい。伊奈帆は食に一言あるから、彼に任せれば間違いないと思い、スレインはそう言った。
伊奈帆はふむ、と頷き、顎に右手を当てて商品をざっと眺める。
「じゃあ……、スレイン。ラーメン、うどん、パスタなら、どれがいい？」
「？ ラーメンかな」
「塩ラーメン、醤油ラーメン、味噌ラーメン。どれがいい？」
「醤油がいい」
「決定」
伊奈帆はしょうゆタイプの鍋の素を選び、裏面の調理法に目を通してからカゴに入れた。なるほど、そういう決め方もあるのか。
「よし。じゃ、お肉と野菜回ろう。お酒も」
「ああ」

「はい、乾杯」
「乾杯」
スレインの部屋のダイニングテーブルに向かい合い、ぐつぐつ煮立つ鍋の上でビール缶がカチンとぶつかる。スレインは缶に口をつけ、ぐい、と煽る。炭酸が喉を通り過ぎ、胃の中で弾ける。急に空腹を感じた。
卓上コンロも、上に乗った陶器の鍋も伊奈帆の部屋からの持ち込みだ。こういう時、僕が隣に行けば話は早いが、それは許可されていない。だから僕の部屋には、伊奈帆が持ち込んだホットプレートや、たこ焼き器や、フォンデュタワーなんかがインテリア然として並んでいる。このコンロも鍋も、おそらくそこに加わるだろう。
「そろそろいいね」
伊奈帆が鍋の蓋を開く。出汁の香りのする湯気がぶわりと広がった。伊奈帆が菜箸で取り分け、差し出された椀を受け取る。琥珀色のスープに浸かる白菜とネギ、つみれが二つ。
「どう？　お鍋」

白菜を一口食べた後、伊奈帆が聞いた。
「美味しい」
「でしょ」
材料を切ってつゆで煮るだけだから、誰でも作れるよ、と伊奈帆は付け加える。謙遜ではなく、僕に勧めているのだろう。引っ越しの袋麺のときもそうだった。
「スープはあまりよそわないで。シメはラーメンだから」
「わかった」
こんな暮らしも、もう二年だ。週に何回か伊奈帆が部屋にやってきて、夕飯を一緒に食べる。はじめは、隣に住むだけではなくこんなことまで、と申し訳なく思ったけれど。伊奈帆が実に楽しそうだから気が抜けた。
伊奈帆、か。
名前で呼ぶようになったのはいつからだったかな。
「スレイン」
「ん？」

鍋の具材が半分ほどになり、一本目のビールが空になったところで、伊奈帆が僕の名前を呼んだ。軽いアルミ缶をコン、とテーブルに置く。伊奈帆も箸と椀を置いた。机の上で組まれた彼の指はアルコールか、それとも室温のせいか少し赤い。
「これは、提案なんだけど」
そこで伊奈帆は押し黙る。スレインは居住まいを正し、机の上で自分の両手を重ねた。
「何だ？」
伊奈帆はじっとこちらを見つめ、一度俯き視線を下に落とした。やがて大きく息を吸い、顔を上げて口を開く。
「一緒に暮らさない？　僕と」
「は？」
スレインは言葉を失い、口を開けたまま伊奈帆を見る。ぐつぐつという鍋の音が大きく響く。伊奈帆が、コンロのレバーを回して火を止めた。
一緒に暮らす？　って言ったのか？　僕と？
「なんで？」

当然の疑問を口にする。伊奈帆はうん、と頷いた。これは、これから説明するからよく聞くように、のサインだ。
「実はね」
スレインは無意識に、ごくり、と唾を飲み込んだ。伊奈帆は少し遠い目をして話し出す。
「近々、行動制限が緩和される予定なんだ。君の」
極秘施設にいた頃と生活水準は段違いだとはいえ、今のこの状況は軟禁状態と言っていい。監視員不在時の外出は禁止され、全ての部屋に設置されたカメラで、生活は二十四時間監視されている。
「今よりもっと、普通の生活に近づける」
カメラの数は減り、一人の外出も許可される。軍とは全く関係のない仕事に就くことも可能。
それは、願ってもいないことだが。
「条件があるんだろう？」

「僕と住むこと」
伊奈帆は、今だって隣の部屋に住んでいて、ほとんど毎日会っていて、こうしてご飯を食べている、と言う。
「お前、それでいいのか？」
「この会話、前にもしたね」
伊奈帆は肩をすくめた。
「僕は、嫌なら断るよ」
「軍人なのに？」
「関係ないよ。僕は好きなように生きているだけ」
その言葉には納得なので、スレインはくすりと笑った。伊奈帆も微笑み、肘をついて体を前に傾ける。
「それで、君はどう？」
「僕？」
「僕と一緒に暮らすの、嫌？」

「プロポーズみたいだな、なんか」
軽口のつもりでスレインが言うと、伊奈帆が口を開いたまま固まった。
「……」
「ん？」
様子がおかしい。
「おい、伊奈帆？」
「……そのつもりなんだけど」
「え……」
ええっ、とスレインは素っ頓狂な声を挙げ、伊奈帆は額に手を当てた。思わず立ち上がったスレインは、テーブルに手をバンと置く。
「お前、僕のこと好きなのか？」
「うん」
「いつから？」
「わかんないよ、そんなの。気づいたら」

伊奈帆は口を尖らせ、上目遣いで見返した。
「でも、結構前。自覚はしてなかったけど、あそこに通っていた頃だろうな」
あそこ。極秘施設。ということは、少なくとも三年以上？　その前も後も、何も無かったことに驚く。嘘だろう？
しーん。長い沈黙の後、スレインは脱力して椅子に座った。
「知らなかった」
「知らなかった？　嘘でしょ？」
伊奈帆が高い声で反応し、目を丸くしてスレインを見る。
「無防備すぎない？　心配になるよ」
「……だってお前……。え？　そんなに前から？　何もしないのが理解できない。普段の押しの強さはなんなんだ？」
え、と中腰になり、伊奈帆は腰を下ろして小さく聞いた。
「もしかして、何もしないのが駄目だった？　だけどさ……」
「違う違う。そうじゃない。僕はてっきり……。お前、恋人はいると思ってたから」

「え？　なんで？　証拠も匂わせも皆無でしょ。実際いたことないし」
「なんでと言われても……」
スレインは頬杖をつき、これまでのことを思い出す。伊奈帆に恋人がいると思い込んでいたのはどうしてだったか……。
「あ。随分前に、家を買ったと言っただろう？」
そうだ。あの時、妙な気持ちになったのを覚えている。そこはかとない怒りと虚しさと、ああ、やっぱり、という諦め。
「近いうちに、結婚でもするのかと」
家を買ったのは、誰かと住むからだろうと。家族ができて、平和な世界に馴染んで過ごして、戦争も僕も忘れて。この関係も終わりだな、と僕は思ったんだ。だから不思議ではあった。何年経っても、こいつが僕を構いにくるのが。
そうか。僕の勘違いか。
ほっとしている自分に少し腹が立つ。伊奈帆は僕のことなんて、忘れていいと思ってたのに。いや、違う。忘れるべきだと思っていた。でも、気持ちは全く逆だった。

「なるほどね」
進展しない理由がわかったよ、と伊奈帆は深く頷いた。
「それで？」
「それで、って？」
スレインが問い返すと、伊奈帆は視線を泳がせた。
「僕は君が好きだけど」
俯き加減で言葉を切る。耳が赤い。彼は一度唇を噛む。机の上で組んだ、指の関節が白くなる。
視線が重なる。これまで何度も見つめた虹彩。かつては共闘者として。次に敵として。また、あるいは同志として。衒いなく僕を見据える右目の色は、左の義眼と少し違う。
「君は、僕のこと好き？」
言葉のはじめは、少しだけ震えていた。
ああ、そうかと今更気づく。

朝焼けの瞳が揺らぐ。表情よりも豊かに移り変わる色はマジックアワーの空に似て、なんて綺麗なんだろう。

「……今更だな」

机に手をつき立ち上がる。ふわっ、と軽い目眩がした。足元が覚束ない。天板で体を支えて歩く。見上げる伊奈帆の顔が大きくなる。

「……スレイン？」

本当に今更だ。ずっと前から、僕は――。

「伊奈帆」

瞼を閉じる。醤油の味とビールの苦味が舌の上で混ざり合う。カン、カラン、と空の缶が床に転がる音がした。

瞼を開くと、左右で僅かに虹彩の異なる瞳があった。左の瞼に唇を寄せる。僕の心臓は、きっとずっとここにあった。

「好きだ。僕も。ずっと前から」

唇が重なる。彼の右手が僕の左手を握った。

二〇二四年七月五日

「意外だったな」

朝食の最中。外を眺めて、伊奈帆がぽそりと呟いた。彼の視線の先には、初夏の花咲く中庭がある。

「何がだ？」

味噌汁を啜った後、スレインは聞いてみた。中庭の花の選びや配置については、やや洋風だが建物とは調和していると思う。伊奈帆の言う意外とは、出来栄えがいいのか、悪いのか。僕に一任したのだから、今更言われても、と思う。

「うまくないか？ 今更だが、改善点があるなら言え」

「いや、綺麗だよ。庭。君に頼んで良かった。意外なのは花の色だよ」

「色？」

ああ、とスレインは頷く。確かに、ホームセンターで苗を選んだ時に伊奈帆は意外そうな顔をしていた。その時は何も言わなかったけれど。

「赤か、青を選ぶと思ったから」

そういうことか。伊奈帆の言葉にくすりと笑う。彼が言いたいことは分かった。

「赤はともかく、青は高すぎるだろう。それに、店頭に無かったし」

スレインは再び窓の外を見た。大きな引き戸のガラス窓。その向こうにあるバラは、上手く根付いて綺麗に咲いた。深い緑の葉を茂らせた桜の木。透明な水で満たされた池。クラスペディア、トラノオ、リキュウソウが黄、白、緑のグラデーションを描く庭の一角に、バラの小さな花園がある。オレンジ色の花弁が、朝日に露を光らせていた。

青いバラ。そういうものに、すがることはもうやめた。

「僕に奇跡は必要ない」

思ったことが声に出ていた。テーブルの向かいを見ると、伊奈帆は僕を見て、外を見て、また僕を見た。急須を持ち上げ湯呑みに注ぎ足す。お茶をずず、と啜ってから。

「そう」

と彼は言った。口元に柔らかな笑みが浮かんでいる。スレインは箸を置いた。
「店の名前、本当にあれでいいのか？」
伊奈帆は目を丸くする。
「今日は開店当日だよ。今更じゃない？」
「そうだけど……」
確かに、看板に字を入れたのは二ヶ月も前のこと。その時から、スレインはずっとひっかかっていた。
「どうしてウミネコ？」
喫茶ウミネコ。店の名前がどうして鳥の名前だろうかと。てっきり、オレンジに関する名にするだろうと思っていたのだ。
伊奈帆は複雑そうな表情で黙りこくった後、ぼそぼそと喋り出した。
「……これは照れくさいから、あまり言いたくないんだけど」
「照れくさい？ それこそ今更だろ」
それで？ と水を向けると白状した。

「君のこと。ウミネコって」
僕のこと？
「なんで？ コウモリならわかるけど」
そうやって伊奈帆に呼ばれたことは何度もある。でも、ウミネコと呼ばれたことは一度もない。
「僕が勝手に一人でそう呼んでいた。……白い機体の君のこと」
後頭部を手で掻きながら、伊奈帆は居心地悪そうに言う。ふっと、以前重機の話をした時のことを思い出した。
——鳥みたいで。
タルシスのことを、鳥みたいだと言っていた。そういうことか。
「なるほどな……」
伊奈帆は俯き黙っている。完全に照れていた。そんな反応されてしまったら、聞いたこちらも恥ずかしい。
「……」

「……」
やがて、伊奈帆がふう、と大きく息を吐いた。
「名前は最初から決めてたんだ」
「最初って、いつから？」
「家を買ってしばらくしてから」
「えぇ⁉」
それって、まだ僕が施設に収監されていた頃か？　そんな時から古民家カフェを計画していたって言うのは。
「……少し怖いな、それ」
「どうして？」
「最初から、僕を働かせるつもりだったってことか？」
「ああ、そういうことか。うーん……。なりゆきだよね」
伊奈帆はからっとした声で言う。
「最初は、君を匿うところを探していたんだ。今だから言うけど、脱獄なんかも考えて

たよ。でも、思ったよりも状況が早く変わって」
「だ、脱獄？」
スレインは唖然として伊奈帆を見返す。とんでもないことを打ち明けられた気がするのだが。
「差し迫った問題を回避して、家が余っちゃったんだ。だったら僕が住もうかなって。せっかく買った家だし、何かお店をやろうと思った。一人でもね。君が一緒に来てくれるとは思わなかったけど。一緒に働ければいいとは思ってた」
伊奈帆は急須を傾け湯呑みに茶を注ぎ足した。緑茶の香りが辺りに広がる。
「戦争って嫌だよね。壊してばかりだった。だからこれからは、壊したり奪ったりせず、できれば何かを作っていければいいなって。小さなことでいいから」
「小さなこと……」
卵を割り入れた、インスタントの袋麺。醤油の味の冬の鍋。出汁巻き卵、スクランブルエッグ、目玉焼き。来客を知らせるドアベル。小さな椅子に外用ベンチ。青地に白いペンキの刷毛で書いた、鳥の名前の吊り下げ看板。他にもたくさん、彼が作った様々の

ものが思い出される。
「だから、君もここにいてほしいなって。でも本当に、こんなにうまくいくとは思っていなかった」
うまくいく。それは、自分の思い通りに事を運ぶという意味ではないのだろうと思う。僕には言わない事情が無数に存在し、そのそれぞれに彼は一人で力を尽くしてくれた。その結果としての今を、うまくいった、という言葉にしか、しないところが彼らしい。
「頑張ったんだな。伊奈帆」
「よしてよ。これはエゴだ」
伊奈帆は言うが、その通りだとは、僕も思う。独善的で利己的な行為だ。
それは僕を自由にするため？いや、もっと単純で。
「お前のエゴは優しいな」
鳥籠の扉をそっと開くような。そんな独りよがりな献身。
「そろそろ、準備しよう」
「ああ」

[2023.12.24]

食べ物のいい匂いで目が覚めた。

「あ、おはよう」

寝室の扉を開けると、キッチンに伊奈帆がいた。

「ああ。……そうか。おはよう」

昨夜の後片付けはすっかり済んでいる。朝食の支度の整ったダイニングテーブルが、朝日を受けてきらきらしている。白いドレッシングのかかったグリーンサラダと、きつね色の食パン。きちんと並んだジャムとバター。逆さを向いたマグカップ。湯気の立つコーヒーポット。砂糖のキャニスターと、計量カップに注がれた牛乳。箸とスプーンとフォーク。

「どうした、これ？　冷蔵庫、何もなかったろう？」

「僕んとこから持ってきた。ジャムと牛乳は、君んとこにあったやつ」
今日は買い出し付き合うよ、と言う伊奈帆になんと返事をして良いか分からず、スレインは曖昧に頷く。
ジュ、と油を引いたフライパンで何かが焼ける音がした。卵料理に違いない。自分一人では滅多に嗅ぐことのない、暖かい食卓の香りに心が和らぐ。
「目玉焼きとスクランブルエッグは、どっちが良かった？」
「どっちでも」
どちらも好きだし、空腹だ。そもそも調理を始めてから聞くことではないな、とスレインは思いつつ席に着く。伊奈帆は少しして、皿を持ってやってきた。
「今日はスクランブルエッグ」
半熟のスクランブルエッグは黄金色で、ケチャップとマヨネーズがストライプを描いている。くう、と腹の虫が鳴った。伊奈帆が対面に座り、カップにコーヒーを注ぐ。差し出されたそれを受け取り、ほとんど同時に手を合わせる。
「いただきます」

「うん、いただきます」
箸を取り、スクランブルエッグをすくって食べる。ケチャップの酸味と甘酸っぱさが、口の中で卵と一緒にふわっ、ととろけた。
「どう？」
「美味しい」
「そう」
伊奈帆は小さく笑ったようだ。彼も箸を取り、食事を始めた。コーヒーの湯気の向こうの手元に無意識に視線が向く。箸を持つ手。爪は短く切り揃えられていて、指先の肉は少し硬い。手のひらは見た目よりも厚くて、温度は僕より温かい。
……何を考えてるんだか。我に返り、スレインは首を振る。コーヒーをごくりと飲み込んだ。
しばらく、食器の音だけが響いた。時折視線が合うけれど、互いにさりげなく逸らす。それが、決して嫌ではない。
「……あのさ」

皿のほとんどが空になったタイミングで、伊奈帆が喋るために口を開いた。
「ん？」
「……その」
いつもなら、立板に水といった調子で淀みなく発声されるのに。珍しく煮え切らない態度が可笑しい。
「何だ？」
「えっと、……体、大丈夫？」
意を決した、という表情で聞かれた内容に、スレインは思わずプッと吹き出した。
「笑うことないんじゃない？　心配してる」
ムッとした声で伊奈帆が言った。無表情を装っているが、耳が真っ赤になっている。
ああ、初めてだったんだな、と思った。
「変な顔してると思ったら、そんなことか」
「そんなこと？」
「怒るな。別に何ともない」

少し辿々しかったけれど、最後までずっと優しかった。痛いところはどこにもない。
「そういうことを聞かれるのは初めてだから、驚いただけだ。よかったよ」
言うと伊奈帆は耳だけでなく、今度は頬と首まで赤くして視線を横に泳がせた。
「……そう」
珍しく照れているのが面白いのでからかってやりたい気持ちもあるが、朝食に免じてやめてやる。温かい卵とパンは舌に甘く、朝の光とコーヒーの香りが心地よい。こんないい朝を迎えられるのは、初めてかもしれない。
「……あのね」
神妙な面持ちで伊奈帆が箸を置いたので、スレインは怪訝に思い手を止める。
「まだ何かあるのか？」
思いの外強い視線が向けられ、たじろぐ。
「勢いとか、軽い気持ちで、とかじゃないから」
昨夜のことを言っているのだ。そんなことか、とまた言いそうになりスレインは口を噤む。言葉を押し戻すつもりでコーヒーを飲み込んだ。真面目というか、律儀というか。

「知ってる」
「知ってるって？」
浮かぶのは、幾つもの断片的な記憶だ。目が覚めた時、心配そうに見下ろす伊奈帆の顔。回数は覚えていない。肌寒い夕方だったり、猛暑の昼間だったり。雨の降る夜半のこともあった。
スレインはそっと目を伏せる。
髪を梳く手を覚えている。あの手を握った日のことも。胼胝ができていて、指先は少し荒れた温かい男の手だった。
この手が、どんな風に僕に触れるか、僕はもう知っている。
「僕が、お前に大事にされているのは知ってる。だから、心配するな」
「心配？」
問い返す声は、少し低くて柔らかい。真摯な響きに、僕は一度瞼を閉じる。そして開く。
「僕は。もう、ちゃんと一人で生きられる」

伊奈帆は目を見開いて、やがて深く頷いた。
「うん」
窓を見る。ガラスの向こう。そこには、晴れた朝と割れた白い月が見える。
地球。火星。月。そして地球。思えば、長い旅をしてきたような気がする。それぞれの場所に、それぞれに忘れがたい記憶がある。
ふと、思い出される言葉がある。
――あなたも懐かしいですか？　生まれ故郷が。
懐かしいか、と問われても、あの頃の僕にはわからなかった。僕には、ずっと無かった。当たり前にあって、離れていても、思い返すと安心して、いつでも心が帰ることのできる場所。故郷、と。僕にそれを言った人たちは、それぞれに故郷を持っていた。愛していたり、憎んでいたり、その両方だったりした。
真向かいに座る男を見る。こちらを見返す双眸の片方は人工のもの。左目のそれはかつての叡智の瞳ではない、ただの義眼だ。

彼の左目が、最後に見たのは何だったのだろう。聞いたことはない。この先、聞くこともないだろう。

「……でも」

右目を見つめる。肉眼の右目。赤みがかったブラウンは、朝焼けの色にも夕焼けの色にも似ていた。大気の層で散乱していく様々の色。壮絶な空の旅を生き抜いて届く赤い光。空の奇跡を閉じ込めたようなこの目が最後に映すのは、僕であればいいなと思ってしまう。そしてまた、僕がこの目で最後に見るのはこの瞳であればいいと。

「僕は、お前の前から消えたりしない」

故郷というもの。今なら少し、わかる気がする。

「……そっか」

伊奈帆は微笑んだ。はにかんだ少年のような笑顔が照れくさい。返す言葉が見つからず、僕はトーストを齧った。

「スレイン」
「ん？」
「この先。やりたいこととか、なんかある？」
すっかり空になった皿が並ぶ食卓で、食後に淹れた緑茶を湯呑みにコポコポ注ぎつつ伊奈帆が聞いた。
「やりたいこと……」
僕は緑茶の匂いの中で考える。やってはいけないことなら簡単。やらなければいけないことは、ここ数年は生きることか。それは上手くやれてると思う。
やりたいこと……。
「さあ、思いつかない」
「何もないの？」
「考えたことがないな……。……僕のことより、伊奈帆。お前は？」

「僕？」
本当に思いつかないし、居心地が悪く感じてきたので、スレインは話題を変えることにした。顎をしゃくってダイニングテーブルの皿を示す。
「お前は料理が得意だし、軍人なんかやるよりも、店をやるのがいいんじゃないか」
「お店？」
ほら、と片手を翻す。
「喫茶店とか。モーニングサービスで、だし巻き卵とスクランブルエッグ、どちらになさいますか、って聞くんだ」
カウンターの向こう側。エプロン姿でフライパンを振る姿を想像したら、中々様になっている。スレインはにやけた顔でふふっと笑った。
「いいね、それ」
伊奈帆も想像したのか、天井を見たまま軽やかな声で言った。
「考えとくよ」

あとがき

アルドノア・ゼロ一〇周年おめでとうございます!!

そしてＺＥＲＯの方舟16.開催おめでとう&ありがとうございます！

あれは二〇一六年のＧＷ。私がふらっと訪れたレンタル店で、アルゼロＤＶＤの一巻と最終巻のパッケージがこちらを向いていたのが全ての始まりでした。「この子（学生伊奈帆）がこう（軍服眼帯）なるの？　へえ（この金髪の子素敵やな。囚われの身？）」と今思えば完全にネタバレを食らいながら手に取ったアルドノア・ゼロ全巻（一期だけ借りてっても明日また来ることになると直感した）。そしてやっぱり止まらず一気見。衝撃的な最終回に心を奪われ、常に視聴後一ヶ月のテンションのまま、戦後の未来をずっと考え続けてきました。そしてようやく「私の世界線は、これが正規ルートだな」と思い至ったのが今回の本です。古民家カフェ。

この人たちを戦争からもう解放してあげたい、という気持ちが強すぎて色んな話を考えてきたものの、やっぱり守った世界、憎しみとともに愛した世界で、身を寄せ合って暮らしていくのがいい

んじゃないかと思います。本編では色んなことがあったけれども、一〇年経ったらもういいんじゃないかと。穏やかな日常を送ってもらえたらと思います。

構想時はもっとライトなコメディタッチの短編集を考えていたのですが、書いているうちに思いのほか真面目な話になってしまいました。没にしてしまったエピソード（エプロン談義とかメニュー会議とかお客さんのリアクションとか）があって心残りがちょこっと。気が向いたら、そのうち二人がちゃんとお店してる本も出したいなあ、と思います。日常系は精神が落ち着きますね。書いている時、本当に楽しかったです。

イメージソング　RADWIMPS「オーダーメイド」

最後までお付き合いいただきありがとうございました。またお会いできますように。

鳴海

奥付

発行　　Scramble/鳴海
発行日　2024.5.12/ZERO の方舟 16
印刷所　（株）しまや出版様

Mail　　jjncg720@yahoo.co.jp
X（Twitter）　@narumiblue
Pixiv ID　955950

本作は制作会社、関係者、及び関係団体とは一切関係ありません。
無断転載、ネットオークションへの出品などはお控えください。